［第八話］

勇ある者は勇を、智ある者は智をつくせ

中岡 慎太郎

明治維新の前夜の慶応三年十一月十五日、坂本龍馬とともに中岡慎太郎は刺客に襲われました。龍馬は高知城下の商家の伜、慎太郎は同じく土佐安芸郡北川村の庄屋見習、ともに郷土の藩では最下級の武士です。

文久三年（一八六三年）土佐藩を脱藩し長州藩に亡命し、脱藩志士たちのまとめ役となります。また、三条実美の随臣（衛士）となり、長州はじめ各地の志士たちとの重要な連絡役となります。活動方針を単なる尊王攘夷論から雄藩連合による武力倒幕論に発展させ、三条実美と連絡をとりつつ、薩摩と長州の志士たちの間を飛び回り、慶応二年（一八六六年）正月、坂本龍馬と共に薩長同盟を

結実させました。これに触発されて土佐藩は二人の脱藩の罪を許し、その後、慎太郎は薩土同盟についても同様に奔走し、薩土密約の締結に成功します。両者のもとに集まっていた武士たちを、土佐藩の影響下におこうと、土佐藩主は、龍馬に「海援隊」、慎太郎に「陸援隊」を組織させ、そのおかげで土佐藩も維新の一翼を担うことができたのです。

龍馬の働きは大きく派手ですが、慎太郎は人に知られぬところで苦心し、功労がありました。やはり土佐藩士で、明治政界の重鎮、自由民権運動の指導者として有名な板垣退助は「坂本はもし暗殺されず生きのびていたら、五代友厚か岩崎弥太郎のような実業家となったであろう。中岡こそは西郷や木戸と肩を並べて、参議として政界に活躍し得る人格・器量をそなえていた」と言っています。

西郷隆盛は慎太郎を「倶に語るべき一種の人物なり」とか「節義の士なり」と語っています。

宮内大臣となった元陸援隊士、田中光顕も曰く「本気で刀を取って戦ったら、

おそらく龍馬より強かった。深沈にして胆略ある人物だった」。学問もすぐれ書もみごとでした。

安芸市と室戸岬の間にある奈半利川を遡る山奥に、生家と記念館があります。庄屋の息子として生まれた中岡慎太郎が、日本の夜明けのために、勇をふるい智をつくした生涯を偲ぶことができます。

※中岡 慎太郎（なかおか しんたろう・慶応三年〈一八六七年〉十一月十七日絶命・三十歳）

◎ 中岡慎太郎を西郷隆盛が激賞したことに「本物人間」と確信しました。

◎ 「日本の夜明け」のために大活躍をした人物の若死には、まことに残念です。

（M生）